**危険なゲーム 5/28/17**

**使徒言行録 1:6-14 スティンストラ牧師**

**馬鹿なことをしてしまって恥ずかしい思いに囚われてしまったことを人前で話すことは好きではない。またそのように思っている人は私だけではないと思う。。。振り返るといつも気分が悪くなってしまう自分の馬鹿な行為をユーチューブなどを通して流されてしまうようなことがあるなら、身の毛がよだつような思いになるのは、私だけなのだろうかと考えるのだ。しかし、好きではない事ではあるが、結局そのような出来事を私は人々とシェアしてしまうのである。**

**たとえば、なにか読みたい本はあるかと思い、最近私は図書館に行った。私の好きな作家の本が、新着本の中にあって、そのカバーに目がとまった。中身をぱらぱらとめくり、おもしろそうだと思い、そして借りて図書館から出てきた。その晩、楽しんでその本を読み始めたところ、なにか慣れ親しんだ箇所が出てきて不思議な気分になってきた。そして第一章の終わりになるまでに、私はあきらかにすでに読んだ本であることがわかった。その本を見たときに、私はすでにその本に出会った経験があったことを単に思い出せなかった。そしてこの出来事をさらに私にとって決まりが悪いものにしたのは、その本のタイトルは「メモリーマン」というものだったからだ。ただ自分がこの出来事に耐え易くした事実があった。それは、その本をお金を出してバーンズノーブルから購入してきたのではなく、図書館からただ借りてきた事だ。**

**このような馬鹿な行いをしょっちゅう起こしているわけではないということを喜んで伝えたいと思うが、実は、悲しいことに私はこのようなことを起こしたとは一回だけではなく、しかも過去6週間以内に、もう一度してしまったのだ。しかもさらに悲しいことに、私の馬鹿げた行いということに関して、いまお話したことは、氷山の一角に過ぎないと言わなければならない。私以外にも似たようなおっちょこちょいをしてしまい決まりの悪い思いをしている人々がいることを知ることは、多少気分をやわらげるものがある。ナディア ボルツ-ウェバー牧師は彼女に起こった出来事を打ち明けている。最近の公演旅行の最中、ホテルにもどったとき、すぐに深い眠りについた。変な姿勢で寝てしまったために、彼女の腕が体の下敷きとなり、その腕はまったくなにも感じないものになってしまった。その腕は死んでしまったかのようだった。そして夜中に、彼女はその腕が自分の腕ではないかのように感じてしまった。そして突然ベッドから出て、真っ暗な部屋の中でイスによろめき、「そこにいるのは誰？」と叫んでしまった。しかし、彼女がそこにいたと思われた誰かに攻撃を開始しようとする時、そこにいた不可思議な侵入者とは、彼女自身の横についていた重い肢体にすぎなかったことに気がついた。そして心拍数がだんだん平常に戻ってきたとき、彼女は自分の腕に恐れをなしてしまった人をだれかが見ていたとしたら、それはどんなにか馬鹿げたものであるかと思い苦笑した。彼女は、外見だけから先入観を持って人を判断しないようによく注意している人物だ。しかし、今回、彼女のベッドの上で彼女の横に殺人者がいたかと思うほどのとても怖い体験をしてから、彼女はなにか間違えられてしまうということは決して心地よいことではないということを身をもって体験した。**

**人間はだれしも、自分が優れていると思いたいものだ。私たちは人々や組織や状況に対して適切に判断して、秩序をもって行動しようとする。だから 自分たちは他人から見てもまた自分たちで見ても馬鹿ではないようにふるまいたい。必要な情報を内々に得て、何が可能で何が不可能かを見極め、神がどういう方でどう世に現れてくださっているかを知るとき、私たちは心地の良い状態となる。しかしその逆に、私たちの考えは限界に達し、いったい何が起こっているのかわからなくなってしまった時、実にみじめなものだ。コンサートに来ていた8歳の子が、聖戦だと称する自爆テロの標的になってしまうような世界を理解しようとしたところで、頭の中の神経がめちゃくちゃになってしまうかのごとくで、この世界はむしろわからないことだらけだとなる。歴史の中で起こってきた世の浮き沈みを整理しようと努力したところで、徒労であり、また危険なゲームである。そのような努力は馬鹿げたことをしてしまったという惨めな思いにおちいることを避けられない。後から考えると馬鹿なことをしたという事に気がつくのと、救い主にある希望と世界の崩壊との幅広い間のどこかにいるということがわかるだけだ。**

**今朝の使徒言行録から、私たちは馬鹿なことをしたという思いを昔から引き継いでいることがわかる。　少なくとも同じようなことをした仲間たちの中に自分たちもいることに気がつく。　イースターの最後の日曜日において、初代のイエスの使徒たちが、なんら私たちとかわらない、おっちょこちょいな言動や行動をとっていたことに気づかされる。私たちと同じように彼等も、平和の実現・神の国の実現には神のタイミングにお尋ねすべきという気持ちだった。もうあれから2000年も経ている今、イエスが天に昇って行かれる時、初代の弟子たちはいったい何がおこっているのかわかっていなかった。主は3年間もの間、教え続けていたのに。イエスは死から復活の後、人として弟子たちの間に40日間現れ、彼等の将来の伝道のための準備をした。そして彼等がイエスに質問した事は、神が人類の歴史に介入したという出来事に関する最終テストで合格できるかどうかについて質問するだけだった。神が彼等の近くからすぐに消えてしまうことについては何も質問しなかった。イエスが父の元に戻ってしまう前に、彼等は時や時間がすべて父なる神に依存しているものであるという彼等の理解が正しいということを確かめた。彼等自身が危険あるいは恥ずかしい思いから守られるだけの義を得たいということだけに興味がおかれていた。彼等が望んでいたのは、ただ歴史の流れの中で勝ち組に入っているという確証だけだった。**

**イエスは現代の私たちに対しても十分に聞くに値するパワフルな言葉を持って弟子たちに答えている。時がわかるということは将来を保証するものでもなければ、私たちの生きる基盤にすべきことでもない。あなたがすでにわかっている信仰がすべてをわからせてくれる。神秘的な歴史を見極めようとすることが信仰ではない。永遠の命とは、神を知ることによって成り立っているとイエスは言われる。決して時とか時間によって成り立っているのではなく、主のおかげで、だれにとってももはや永遠の命が不可解な事ではなくなった。　イエスの宣教とは、神との関係がどのようなものか、どんな感覚を抱くか、どんな味がするのか、どんな音がするのか、またどんなにおいがするのか、そのようなものなのだ。初代のキリスト教徒たちは、彼等の先生、イエス、が神の真理を分かち合うために送られたのではなく、神とその御国が弟子たちの前に示されるためにイエスが送られたと信じた。たとえどんなばかなことをして悩んでいるような事態にあるにもかかわらず、神に愛されていることをおぼえ、救い主の腕のなかでともに歩むことが信仰である。それは、あなた方がそのままの状態で神に属していると感じることである。**

**だから予測もつかないような世界で、時を見極めようとするような自己満足でしかない危険なゲームをしないように。長い歴史の中でいったいどのようなタイミングに私たちが生きているのか見極めたりすることはしないようにしたい。どのような時代のどのような時期に生きているのかを知ることは皆さんの仕事でない。それどころか、イエスによれば、あなたが探し求めている神の御国はもうすでにあなた方の中に来ているのだ。　どうせあなたの視界から消えていってしまう何かが天に上がって行くのを口をポカンと空けて立って見ていることは、なんらあなたに良き効果をもたらさない。すでに読んだ本をそれだと気づかずに借りてきてしまう惨めな男とか自分自身の腕なのにそれに恐怖を覚えて夜中に飛び起きてしまう惨めな女性と同じような馬鹿げた者にするに過ぎない。すでにわかりきったことの見極めをすることに確証を求めるようなことは止めた方が良い。それよりも、こよなく世を愛し、世が消えてしまうようなことをひたすら阻止しようとしておられる神の目から、この世を見るようにしたい。アーメン**